

青少年の self-esteem 測定の試み

筑波大学心理学系 加藤 隆勝

上越教育大学学校教育学部 斉藤 誠一

筑波大学大学院 (博) 心理学研究科 瀧野 揚三

A study on the measurement and determinants of self-esteem in early adolescence.

Takakatsu Kato (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Ibaraki 305 Japan*),

Seiichi Saito (*College of Education, Joetsu University of Education, Niigata 943 Japan*), and

Yozo Takino (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Ibaraki 305 Japan*)

This study aimed at constructing two types of self-esteem (SE) scales, examining determinants of early adolescents' SE measured by them, and comparing characteristics of these two SE scales. A sentence completion type SE scale containing 14 stems (SES-I) and a rating type SE scale consisted of 20 items (SES-II) were constructed and validated. These scales were administered to 63 male and 61 female sixth graders. (1) High SE males on SES-II evaluated their fathers and mothers more positively than low SE males. (2) High SE males on SES-II completed the sentences with consistently more positive contents than low SE males in four (body image, family life, school life, present self) out of six domains of SES-I (3) High SE females on SES-II evaluated their fathers more positively, and were evaluated more highly on their academic achievement by their teachers than low SE females. It was concluded that SES-I was suitable for investigating contents of each individual's SE qualitatively, while SES-II was appropriate for examining the relationships between SE and other variables quantitatively.

Key words: self-esteem, sentence completion tests, rating scales, early adolescence.

従来から self-esteem は、行動を規定する要因として種々の側面から検討されてきたが、遠藤他(1974)に述べられているように研究者により様々な概念規定がなされている。しかしながら、self-esteem は個人の自己に対する感情的評価の側面を指すとする点では共通しており、自己意識の発生とともに、いずれの発達段階にあっても存在するものといえよう。とりわけ、青年期においては、自己意識の高まりとともに、自己の内省化が深まり、そこで認知された自己概念、それに伴う self-esteem が行動に大きな影響を与えるものとされている。

ところが、self-esteem の概念的 중요性の強調に比

して、実証的測定方法の開発は必ずしも進んでいない。先駆的研究として、Coopersmith (1959) は MMPI から抽出した項目に基づき、self-esteem inventory を作成しているが、遠藤他(1974)はむしろ Rosenberg (1967) をこの領域における実証的研究の導入者として評価している。これらの尺度は、いずれも海保・山下(1968)、松下(1969)等により日本語版の作成が試みられている。また、遠藤他(1974)も、Janis と Field の測定尺度をもとに23項目からなる尺度を作成している。本邦ではこれらの尺度が使われることが多いが、細かに項目を検討していくと問題がないわけではない。たとえば、用語やその内容

等の点である程度の年齢段階にならないと使用が困難なもの、具体的、日常的な内容というよりは、むしろ抽象的、一般的な内容が多く、青年期の知的発達を前提としているものが多いことがわかる。その点から、本研究で対象とする小学校高学年から中学生に対しては、日常生活の中でより具体的に経験しうる感情を取り上げる方が望ましいと思われる。

ところで、日常生活についての感情的側面での評価のひとつに生活感情と呼ばれている概念があり、少なからず self-esteem と関連を持つものと思われる。斉藤(1968)は連帯-孤独、安定-不安定、充実-空虚の3つの下位尺度からなる生活感情尺度(SD法30項目)を作成し、いくつかの対象に対して検討を行っている。また、大野(1984)の充実感尺度、西平(1983)が紹介している人生態度尺度も生活感情を出発点としたものであり、self-esteem を直接的ではないにしろそれに関連した内容を測定しているものと言えよう。

一方、self-esteem 測定のもう一つの側面として、投影法的手法に基づくものがある。たとえば、杉浦(1974, 1975, 1976)は文章完成法により、また菅(1975)は文章完成法、ロールシャッハ・テスト、baum・テストにより測定を試みている。これらも基本的には、被験者の反応をいくつかの観点から得点化し、数量的に処理することになるが、被験者のより自発的な反応を得ることができる点は評定尺度にはない特徴といえる。しかし、より一般的な測定方法となりうるには、得点化の妥当性や質的な分析方法の一層の開発が望まれている。

以上の self-esteem 研究、特に測定方法の現状を踏まえ、本研究ではまず第一に、まだ十分な抽象化が困難な小学校高学年から中学生を対象として、self-esteem の測定尺度の作成を行う。その際、(1)比較的具体的な生活感情の中から self-esteem と関連する内容を項目とした評定尺度形式のもの、(2)被験者の自発的の反応をもとにした、投影法的性格を持つ文章完成法形式のもの、の2種の測定尺度を作成することを目的とする。次に、作成された2つの尺度を用い、self-esteem と他の心理的諸変数との関連を検討することを第二の目的とする。具体的には、self-esteem の高い者と低い者の心理的特徴を明らかにすることを通して、self-esteem の規定要因についての基礎的・探索的な検討を試みるとともに、2つの尺度の特質についても考察する。

研究 I

目的

青少年を対象として、self-esteem を測定するため

の2種類の尺度、すなわち文章完成法形式によるものと評定尺度形式のものを作成することを目的とする。

方法

調査対象および調査時期

以下に述べる2つの測定尺度を作成するために、1985年7月から1986年2月にかけて数回の調査が実施され、小学6年生合計384名(男子191名、女子193名)、中学2年生合計67名(男子38名、女子29名)が調査対象とされた。調査人数の詳細は各手続きごとに述べる。

手続き

2つの尺度とも、結果に示すように予備項目作成と調査の実施、最終項目の決定、妥当性・信頼性(ただし、信頼性は評定尺度形式のもののみ)の検討の順でなされた。

結果

測定尺度の作成

1. self-esteem 尺度 I (文章完成法形式。以下、SE 尺度 I とする)

(1) 予備項目作成と調査の実施

杉浦(1974, 1975, 1976)、菅(1974)等を参考にして、予備項目の選定を行った。選定にあたっては、self-esteem の形成に重要と思われる3側面、すなわち身体、生活環境、時間的変化の側面を設定し、さらに生活環境では家庭生活と学校生活、時間的変化では過去、現在、未来に細分化し、全部で6つの項目領域を設定した。4名の心理学専攻者によって、各項目領域についての項目が収集され、4名が一致してより適切であると判断した21項目が選定され、実施された。対象は小学校6年197名(男子95名、女子102名)、中学2年67名(男子38名、女子29名)であった。

(2) 回答の分類およびその信頼性と得点化の方法

記述内容は、(a)肯定的反応、(b)否定的反応、(c)両面的・並列的反応、(d)中立的反応に分類された。分類に先立ち、ランダムに抽出された40名の記述内容について、2名の心理学専攻大学院生が独立に分類を行い、判定の信頼性を検討したところ、92.1%の一致率を得た。得点化は、上記の肯定的反応、否定的反応、両面的・並列的反応について行い、それぞれ総反応数を得点とした。ただし、両面的・並列的反応については、前者2反応をともに含むものとして、両反応にそれぞれ加点された。

(3) 最終項目の決定

得られた197名の記述内容について、内容的な妥当性、反応の傾向などが検討された。具体的には、

無回答や中立的反応が少ないこと、特定の反応に偏らず反応に適当なばらつきがあること等が基準とされ、7項目が削除され、Table 1 に示す14項目が最終項目とされた。

Table 1. self-esteem 尺度 I

領域	項目
身体	私のスタイルは
家庭生活	母は私を
	父は私を
	うちの中で私は
学校生活	友達を私を
	体育の時間は
	先生は私を
	学校の成績は
	友だちに比べて私は
過去	小さいとき私は
現在	私の性格は
	私は今の自分を
未来	私のやりとげたいことは おとなになったら

(4) 妥当性の検討

小学6年73名(男子32名, 女子41名)に対して, SE 尺度 I と Y-G 性格検査を実施し, 両者の関連が検討された。SE 尺度 I については, 肯定的反応得点, 否定的反応得点, 差異得点(肯定的反応得点から否定的反応得点を引いた得点)が算出され, Y-G 性格検査の各下位尺度との相関が算出された。その結果, 情緒的不安定性(D, C, I 尺度)は, 肯定的反応得点, 差異得点との間に $r = -.25 \sim -.30$ の負の相関が, 否定的反応得点との間に $r = .20 \sim .30$ の相関が見られた。活動性(G 尺度)は, 肯定的反応得点, 差異得点との間に $r = .34 \sim .37$ の相関が, 否定的反応得点との間に $r = -.36$ の負の相関が見られた。さらに, 外向性(A, S 尺度)は, 肯定的反応得点, 差異得点と $r = .27 \sim .30$ の相関が, 否定的反応得点と $r = -.25 \sim -.31$ の負の相関が見られた。したがって, self-esteem と関係があると考えられる情緒的安定性, 活動性, 外向性との間に, 期待される相関が認められ, SE 尺度 I がおおむね基準関連妥当性を満たすものであると考えられる。

さらに, 中学2年67名(男子38名, 女子29名)について, 安定感, 劣等感, 積極性, 責任感, 努力の5

つの観点から, 教師による評定が行なわれ, SE 尺度 I との関連が検討された。その結果, Table 2 に示すように, 肯定的反応得点について, 安定感, 積極性, 責任感, 努力の観点で望ましいと評定された群の方が, 望ましくないと評定された群よりも有意に高い得点を得ており, この点からも SE 尺度 I の妥当性が示唆された。

Table 2. 教師評定と SE 尺度 I 得点の平均値

教師評定 (n)	肯定的 反応得点	否定的 反応得点	差異得点
安定感 ○ (10)	8.20*	4.10	4.10
× (9)	4.89	5.11	-0.22
劣等感 ○ (9)	7.22	5.33	1.89
× (10)	5.60	3.60	2.00
積極性 ○ (7)	6.86*	6.29	0.57
× (10)	3.90	6.00	-2.10
責任感 ○ (11)	7.36*	5.09	2.27
× (7)	3.71	5.14	-1.43
努力 ○ (9)	7.67*	5.22	2.44
× (9)	4.89	5.22	-0.33

* $p < .05$

注) 各評価観点において, ○印は望ましいと評定された群, ×印は望ましくないと評定された群を示す。劣等感の場合は, ○印は劣等感が少ないことを意味する。

2. self-esteem 尺度 II (評定尺度形成。以下, SE 尺度 II とする)

(1) 予備項目作成と調査の実施

具体的な生活の中で表出されると思われる感情の中で, self-esteem を表現すると考えられる項目が, 西平(1983), 大野(1984)等を参考にして作成された。具体的には, 連帯-孤独, 安定-不安定, 充実-空虚, 積極性-消極性, 自信-劣等感, 時間的展望の有無, 現実肯定-現実否定の7つの側面から各側面4~7項目が収集された。4名の心理学専攻者によって, 内容, 用語の適切さ等が検討された結果, 予備項目として42項目が選定された。予備調査は小学6年236名(男子121名, 女子115名), 中学2年67名(男子38名, 女子29名)を対象に実施され, 回答は「とてもよくあてはまる」から「まったくあてはまらない」までの4件法で求められた。

(2) 最終項目の決定

全回答のうち, 欠損値を含まない277名が分析対象とされ, 全体をこみにして因子分析(主因子解, ヴァリマックス回転)が行われた。いくつかの因子

Table 3. 因子分析結果と SE 尺度 II

項目設定の カテゴリ	項目	因子分析結果			SE 尺度 II		
		因子			自己肯定	積極性	無力感
		I	II	III			
連帯—孤独	1. 私は、友だちがたくさんいる方だ	.466			○		
	8. 自分の気持ちをわかってくれる人はいない	-.354		.363			
	15. だれとでもなかよくやっつけていける方である	.511			○		
	18. いま、自分がいなくなってもさびしがってくれる人はいない	-.341					
	29. 友だちといっしょに遊んだり、勉強したりすることは楽しい	.424					
	38. 友だちといっしょにいるよりも、ひとりであった方が楽しい	-.323					
安定—不安定	3. 悩んだり、こまったりしても気持ちが落ちこむことはない			.343			
	12. ちょっとしたことでもいらいらしてしまう			.393			○
	21. いやなことがあっても、人にやつあたりしたりしない	.499	.323	.389	○		
	33. 友だちになにか言われると、気になってしかたがない						○
充実—空虚	5. 毎日の生活が楽しい	.738			○		
	14. 何もやる気がしないことがたびたびある				○		
	19. 毎日、毎日がいきいきしている	.639					
	24. なんとなく一日が過ぎてしまう感じがする			.392			○
積極性—消極性	7. 家や先生のでつだいを進んでやる方である		.398			○	
	10. 自分の意見よりも、他の人の意見にしたがうことが多い		-.352	.310			
	17. 勉強でも遊びでも一生けんめいやる方である	.305	.484			○	
	28. なにをするにしても、先生や両親から言われなくてできない		-.325			○	
	35. 良いと思ったことは、だれに言われなくてもやる		.613			○	
	37. 自分で目標をたてて勉強をする方である		.527			○	
42. あまりおもしろくなくても、友だちと同じことをしていた方がよい			.326				
自信—劣等感	5. 勉強や運動で友だちより劣っていることが多い			.322	○		
	9. 毎日、自信をもって生活している	.650		.353			○
	20. 両親や友だちの助けを借りることが多い			.509		○	
	23. 自分の意見をみんなの前で進んで発表できる		.611			○	
	32. 私は、他の人のために役立つことができる		.439			○	
	39. これなら人に負けないというものがある	-.301		.555			○
時間的展望	2. 小さかったころにもどりたい				○		
	13. 自分は幸せだ	.583					
	16. 友だちよりも不幸だと感じる	-.381		.390			
	27. 生まれかわるとしたら、いまと同じ性別(男子は男,女子は女)がよい						
	34. 日本に生まれてきてよかった						
36. 楽しいことよりも、つらいことの方が多い	-.497		.466				
現実肯定—現実否定	4. 将来、なにをしてよいかわからない		-.310				
	11. 将来、ああしたい、こうしたいという夢がある		.326				
	22. いま楽しければ、将来はどうでもよい						
	25. 自分の未来は明るい	.515			○		
	31. おとなにはなりたくない						
41. 一年先、二年先の自分を考えるのは楽しい	.320						

注) 因子分析結果は、因子負荷量が、.30以上を記載した。

SE 尺度 II は、○印が採用された項目を示す。

抽出が試みられたが、もっとも妥当に解釈が可能な3因子が抽出された(Table 3)。第1因子は7側面のうち積極性-消極性を除く6側面に負荷量が.4以上の項目を持ち、全体として自己の肯定感や自己の安定感を示していると考えられたので、自己肯定の因子と命名された。第2因子は、主として積極性-消極性の側面に負荷量の高い項目が集まっているので、積極性因子と命名された。第3因子は、前述の2因子と異なり、現実肯定-現実否定以外の側面において劣等感、不安定、空虚などを表わす項目で負荷量が高いため、無力感因子と命名された。

以上の3因子に基づいて、負荷量が.35以上あり、同一項目での他の因子負荷量との差が、.1以上あることが基準とされ、3つの下位尺度からなるSE尺度Ⅱ(20項目)が作成された(Table 3)。

(3) 信頼性の検討

小学6年384名(男子191名, 女子193名)を対象にして、内部一貫性を α 係数により求めたところ、自己肯定尺度で.83、積極性尺度で.73、無力感尺度で.56の値を得た。さらに、小学6年112名(男子53名, 女子54名)を対象に25日の間隔を置いて再検査を行った。その結果、各尺度の相関係数は、自己肯定尺度で $r=.72$ 、積極性尺度で $r=.84$ 、無力感尺度で $r=.56$ であった。以上により、無力感尺度ではいずれの値もやや小さいが、3つの下位尺度とも一応信頼性を満たすものと考えられよう。

(4) 妥当性の検討

小学6年112名(男子53名, 女子59名)に対して、前述したSE尺度Ⅰと同様の観点で教師による評定を行い、各観点ごとに評定に基づく2群について、SE尺度Ⅱの得点を示したのがTable 4である。これによると、自己肯定尺度では、安定感、劣等感、積極性、責任感の観点で望ましいと評定された群の方が有意に高い得点を示した。また、積極性尺度では、劣等感、積極性、責任感、努力の観点で望ましいと評定された群の方が有意に高い得点となっている。他方、無力感尺度においては、いずれの観点においても両群の間に有意差はみられなかった。以上の結果より、SE尺度Ⅱについて、無力感尺度に十分な妥当性は示されなかったが、自己肯定、積極性の両尺度は概ね妥当性を満たすものといえよう。無力感尺度は今後さらに検討が必要と考えられる。

3. SE尺度ⅠとSE尺度Ⅱの関係

SE尺度Ⅰの肯定反応得点、否定反応得点、差異得点と、SE尺度Ⅱの自己肯定得点、積極性得点、無力感得点の相関係数をTable 5に示す。SE尺度Ⅰの各得点との関係を見ていくと、無力感得点との

Table 4. 教師評定とSE尺度Ⅱ得点の平均値

教師評定 (n)	自己肯定得点	積極性得点	無力感得点
安定感 ○ (18)	3.31*	2.64	2.31
× (8)	2.61	2.61	2.65
劣等感 ○ (9)	3.28*	2.97**	2.60
× (15)	2.76	2.30	2.56
積極性 ○ (15)	3.26*	3.19**	2.43
× (15)	2.84	2.35	2.51
責任感 ○ (19)	3.14*	2.82*	2.54
× (11)	2.55	2.30	2.27
努力 ○ (16)	3.20	2.90**	2.39
× (15)	3.13	2.31	2.53

** $p < .01$, * $p < .05$

注) 各評価観点において、○印は望ましいと評定された群、×印は望ましくないとして評定された群を示す。

SE尺度Ⅱは、3下位尺度とも望ましい方から4,3,2,1と得点化されている。したがって無力感尺度は高得点ほど無力感が少ない。以下も同様である。

相関はやや低いものの、自己肯定得点と積極性得点とは絶対値で.35から.53を示しており相応の関係は認められると言える。したがって、self-esteemについて、SE尺度Ⅰは肯定的反応と否定的反応を中心とした測定方法、SE尺度Ⅱは量的な側面を広範にとらえる測定方法として、方法は異なるものの一貫した測定がなされるとみることができよう。なお、SE尺度Ⅰについてはここで示した方法のみならず、より具体的な内容分析等の工夫が期待できよう。

Table 5. self-esteem 尺度ⅠとⅡの相関

		S E 尺 度 Ⅰ		
		肯 定 的 反 応 得 点	否 定 的 反 応 得 点	差 異 得 点
S E 尺 度 Ⅱ	自己肯定得点	.47**	-.42**	.49**
	積極性得点	.53**	-.35**	.49**
	無力感得点	.21**	-.28**	.27**

** $p < .01$

研 究 Ⅱ

目 的

研究Ⅰで作成されたSE尺度ⅠとSE尺度Ⅱを用い、青少年のself-esteemの特質について、この時期の彼らにとって重要と思われる心理的諸変数との

関係を検討する。具体的には、急速な身体発達を経験する時期であるので身体的側面から身長計測値、一日の生活の大半を過ごす学校生活の中から学業成績と学級内の社会的地位、対人関係の中で重要なものとして父親、母親、学校の先生に対するイメージをとりあげ、SE尺度Ⅰ、SE尺度Ⅱとの関係を検討していく。

方 法

分析対象：研究Ⅰで用いられた調査対象のうち、以下に示す調査内容がすべてそろっている小学6年124名(男子63名、女子61名)が分析対象とされた。

調査内容

- ① self-esteem の測定：SE尺度ⅠとSE尺度Ⅱが用いられた。SE尺度Ⅰについては2名により評定された。また、SE尺度Ⅱについては、各項目とも望ましい方から4、3、2、1と得点が与えられ、各下位尺度得点はそれぞれの平均値が用いられた。
- ② 身長計測値：定期健康診断における計測値を用いた。
- ③ 学業成績：担任教師により3段階に評定されたものに、上位より5、3、1の得点を与えた。
- ④ 学級内での社会的地位：ソシオメトリックテスト形式で、親しい友人を3名選択させ、被選択総数、順位により重みづけした被選択得点(被選択順位により、1位には3を、2位には2を乗じてから、すべてを加算した)および被第1選択総数を指標とした。
- ⑤ 「父」、「母」、「学校の先生」のイメージ：加藤他(1981)の対人イメージ尺度より、15項目の形容詞対を選び、6件法で評定させた。なお、

この15項目について、予備的に因子分析がなされ、3因子が抽出されたので、この結果に基づき、信頼(まじめ-ふまじめな、信頼できる-信頼できない等)、明朗(あかるい-くらい、元気な-元気のない等)、やさしさ(あたたかい-つめたい、やさしい-きびしい等)の下位尺度ごとに主として分析を行った。

結果と考察

1. 全体的傾向

(1) self-esteem

SE尺度Ⅰの結果をTable 6に示す。14項目中男女とも6項目程度肯定的反応をしている。また、男子で5項目程度、女子で6項目程度否定的反応をしており、否定的反応得点に性差が認められた。SE尺度Ⅰで見ると、一般に児童はある程度の肯定感、否定感を持ちながらも、肯定的な感情をより多く持っていると言えよう。

一方、SE尺度Ⅱにおいては、Table 7に示すように、自己肯定得点で性差がみられ、男子の方がより自己肯定的傾向を示している。積極性、無力感の2得点においては、性差は見られず、おおむね男女とも同じような得点傾向を示している。また、全体としては自己肯定得点が高くて高く、次に積極性得点が尺度得点の中間値(2.5)をやや越える程度の高さにある。しかしながら、無力感得点はこの中間値をやや下回り、ある程度の無力感が同時に存在していることを表している。

このことは、SE尺度Ⅰにおける否定的反応に対応していると思われ、どちらか一方の感情に支配されるのではなく、集約すればpositiveとnegativeなものがともに存在し、ひとつのself-esteemを構成しているものと推測される。

Table 6. SE尺度Ⅰ得点の全体的傾向

	男	子	女	子
	平均 (S D)	最大~最小 (レンジ)	平均 (S D)	最大~最小 (レンジ)
肯定的反応得点	6.41 (2.95)	13~2 (11)	6.18 (2.78)	12~2 (10)
否定的反応得点*	4.89 (2.92)	11~0 (11)	5.97 (2.41)	12~1 (11)
差異得点	1.52 (5.44)	13~-9 (22)	0.21 (4.38)	10~-10 (20)

* $p < .05$

さらに、SE 尺度 I について、6つの領域ごとに差異得点を、1以上(肯定的反応傾向)、0、-1以下(否定的反応傾向)の3つに分類した結果を Table 8 に示す。性差が示されたのは身体領域で、男子がほぼ同程度に分布しているのに対して、女子では否定的反応を示す割合が多いといえよう。その他の領域では、過去領域で男女とも半数以上が否定的反応傾向を示し、未来領域では肯定的反応傾向を示しているのが、特徴的と言える。

(2) 心理的諸変数 (Table 9)

身長計測値：性差が認められ、女子の方が男子を上回っており、従来から知られているように、思春期の身体発育が女子の方が早く始まるという傾向が示されている。

学業成績：性差が認められ、担任教師による評定では女子の方が高く評定されていると言える。

学級内における社会的地位：被選択数に基づき、3つの指標を算出したが、いずれにおいても性差は見られなかった。被選択総数は、0~8に分布し、最頻値は男子が0と1でそれぞれ11名(17.5%)、女子が3で19名(31.1%)となり、男子ではだれからも選択されない児童の割合が多いと言える。

対人イメージ

「父」のイメージ：性差は見られず、男女とも、信頼、明朗、やさしさのいずれも4点台を示しており、父親に対して望ましい方向のイメージを

Table 7. SE 尺度 II 得点の全体的傾向

	男子	女子
自己肯定得点	3.25 (0.54)	3.03 (0.62)*
積極性得点	2.55 (0.57)	2.63 (0.53)
無力感得点	2.46 (0.49)	2.44 (0.61)

* p < .05

もっており、良好な関係にあるものと思われる。「母」のイメージ：男女とも、父親よりさらに高い得点を示しており、良好な関係が示唆されている。また、明朗得点では性差もみられ、女子の方が母をより明朗であると評価している。「学校の先生」のイメージ：やさしさ得点は、父親や母親の場合よりは低いものの、信頼、明朗の両得点では、同程度に高く評価している。いずれの対象に対しても、概して高い得点を示しており、全体としては人間関係の面では、良好な状態にあると思われる。

2. self-esteem と心理的諸変数との関連

次に、self-esteem が高い者と低い者では、どのような違いがあるのか、特に青少年にとってより重要と考えられる心理的諸変数との関連を検討する。そ

Table 8. SE 尺度 I における各領域ごとの反応傾向 (%)

領域 (項目数)	男子			女子		
	+	0	-	+	0	-
身体 (1)	19 (30.2)	20 (31.7)	24 (38.4)	8 (13.1)	10 (16.4)	43 (70.5)*
家庭生活 (3)	26 (41.3)	11 (17.5)	26 (41.3)	28 (45.9)	10 (16.4)	23 (37.7)
学校生活 (5)	32 (50.8)	8 (12.7)	23 (36.5)	24 (39.3)	13 (21.3)	24 (39.3)
過去 (1)	15 (23.8)	15 (23.8)	33 (52.4)	14 (23.0)	10 (16.4)	37 (60.7)
現在 (2)	22 (34.9)	22 (34.9)	19 (30.2)	16 (26.2)	18 (29.5)	27 (44.3)
未来 (2)	46 (73.0)	12 (19.0)	5 (7.9)	48 (78.7)	13 (21.3)	0 (0.0)+

* p < .05, + p < .10

注) +は差異得点が1以上(肯定的反応傾向)、-は差異得点が-1以下(否定的反応傾向)を示す。以下、Table 11, 13, 15, 17 においても同様である。

Table 9. 心理的諸変数の平均値(SD)

		男 子	女 子
身長計測値(cm)		144.4 (5.88)	147.5 (5.82)**
学 業 成 績		2.65 (1.63)	3.36 (1.53)*
社会的地位	被 選 択 総 数	2.86 (1.63)	2.80 (1.44)
	被 選 択 得 点 (重みづけ)	5.81 (2.21)	5.79 (3.12)
	被 第 一 選 択 数	1.00 (1.09)	0.98 (0.81)
対人イメージ	信 頼	4.77 (0.91)	4.65 (0.86)
	「父」 明 朗	4.99 (0.89)	4.93 (0.91)
	や さ し さ	4.13 (0.99)	4.07 (1.08)
	信 頼	4.89 (0.83)	5.09 (0.70)
	「母」 明 朗	4.99 (0.95)	5.36 (0.73)*
	や さ し さ	4.38 (1.06)	4.64 (1.00)
	信 頼	4.87 (1.01)	5.07 (0.82)
	「先生」 明 朗	4.89 (1.14)	5.20 (0.92)
	や さ し さ	3.76 (1.00)	3.94 (1.04)

** $p < .01$, * $p < .05$

の際、self-esteemの高さの指標としては、SE尺度Ⅰについては、肯定的反応得点と否定的反応得点を用い、SE尺度Ⅱについては、より高い妥当性が認められ、self-esteemのよりpositiveな側面を測定していると考えられる自己肯定尺度と積極性尺度の2つの下位尺度を用いる。また、SE尺度Ⅰについては、反応内容を項目領域ごとに前述したような検討を行うため、従属変数としても用いる。

分析にあたって、まず次のようにself-esteemの高い群と低い群を設定した。すなわち、SE尺度Ⅰでは14項目中の過半数(8以上)を基準として、肯定的反応得点が8以上のものを肯定的反応群(P群)、否定的反応得点が8以上のものを否定的反応群(N群)とした。また、SE尺度Ⅱでは、望ましい方から4、3、2、1と得点化しているため、いずれの項目にも望ましい反応をしていることを前提として、平均値で3を基準とし、各尺度得点ごとに平均値が3以上を高得点群(H群)、それ未満を低得点群(L群)とした。分析は男女別に、それぞれで設定された2群について、独立に検討を行い、さらにSE尺度Ⅱについては両下位尺度の得点を組合せて、高得点群(HH群)と低得点群(LL群)を設定し、検討を進める。

(1) SE尺度Ⅰにおける肯定的反応群(P群)と否定的反応群(N群)の特徴

各群の心理的諸変数の平均値をTable 10に示す。男子において、両群に有意差は見られず、わずかに「母」に対する信頼得点と明朗得点で有意に近い差が見られ、P群の方が高い得点を示した。また、女子においても「父」に対する信頼得点とやさしさ得点に有意差が認められたにとどまったが、いずれもP群の得点がN群を上回った。概して、男女とも両群間に明確な違いは見られなかったが、対人イメージでは有意差はないものの、大部分でP群の方が高い得点を示しており、傾向としては肯定的反応群の方が望ましい人間関係をもっているものと推測された。

次にSE尺度Ⅰにおける項目領域ごとの反応傾向をTable 11に示す。ここでは、P群とN群の設定上当然のことながら反応に違いが見られた。男子では、すべての項目領域で両群に反応傾向の違いが見られた。すなわち、P群は過去を除く他の領域で肯定的反応傾向の割合が高く、N群は未来を除く他の領域で否定的反応傾向の割合が高い。女子においては、過去と未来の領域では両者に大きな反応の違いは見られないが、身体、家庭生活、学校生活、現在の領域で違いが見られた。したがって、SE尺度Ⅰを全領域の反応をこみにして分析するだけでなく、反応領域ごとに分析することによりさらに細かな特徴を見いだすこともできるものと思われる。

Table10. SE 尺度ⅠのN群とP群の比較

		男		子		女		子		
		N(13)		P(27)		N(15)		P(16)		
	身長計測値(cm)	146.4	(5.19)	143.6	(5.83)	150.2	(5.99)	147.6	(6.15)	
	学業成績	2.85	(1.73)	2.33	(1.66)	3.27	(1.67)	3.75	(1.61)	
社会的地位	被選択総数	2.46	(2.37)	2.93	(2.42)	2.93	(1.39)	2.94	(1.73)	
	被選択得点(重みづけ)	5.46	(5.78)	5.67	(4.67)	6.20	(3.53)	5.88	(3.61)	
	被第一選択数	1.00	(1.53)	0.93	(0.96)	1.07	(1.16)	0.81	(0.54)	
対人イメージ	「父」	信 頼	4.55	(1.33)	4.73	(0.83)	4.33	(0.77)	5.11	(0.94)*
		明 朗	4.43	(1.34)	5.11	(0.69)	4.53	(0.97)	5.15	(1.12)
		やさしさ	3.89	(1.21)	4.32	(0.94)	3.69	(1.23)	4.67	(1.03)*
	「母」	信 頼	4.55	(0.94)	5.03	(0.64)+	4.96	(0.76)	5.26	(0.66)
		明 朗	4.56	(1.08)	5.12	(0.74)+	5.44	(0.68)	5.38	(0.92)
		やさしさ	4.25	(1.16)	4.44	(1.07)	4.60	(0.87)	5.04	(0.83)
	「先生」	信 頼	4.98	(0.93)	4.94	(0.80)	4.88	(0.82)	5.05	(0.97)
		明 朗	4.62	(1.06)	4.86	(1.27)	4.64	(1.31)	5.19	(0.77)
		やさしさ	3.79	(0.86)	3.89	(0.97)	3.69	(0.97)	4.10	(1.15)

* $p < .05$, + $p < .10$

Table11. SE 尺度ⅠのN群とP群のSE 尺度Ⅰにおける各項目領域ごとの反応傾向(%)

領 域 (項目数)	男			子			女			子		
	N (13)			P (27)			N (42)			P (17)		
	+	0	-	+	0	-	+	0	-	+	0	-
身 体 (1)	1 (7.7)	4 (30.8)	8 (61.5)	13 (48.1)	9 (33.3)	5 (18.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	15 (100.0)	5 (31.3)	3 (18.8)	8 (50.0)
家庭生活 (3)	1 (7.7)	3 (23.1)	9 (69.2)	21 (77.8)	4 (14.8)	2 (7.4)	3 (20.0)	1 (6.7)	11 (73.3)	14 (87.5)	1 (6.3)	1 (6.3)
学校生活 (5)	0 (0.0)	1 (7.7)	12 (92.3)	24 (88.9)	0 (0.0)	3 (11.1)	0 (0.0)	3 (20.0)	12 (80.0)	13 (81.3)	2 (12.5)	1 (6.3)
過 去 (1)	0 (0.0)	1 (7.7)	12 (92.3)	8 (29.6)	7 (25.9)	12 (44.4)	4 (26.7)	2 (13.3)	9 (60.0)	6 (37.5)	2 (12.5)	8 (50.0)
現 在 (2)	1 (7.7)	2 (15.4)	10 (76.9)	15 (55.6)	9 (33.3)	3 (11.1)	1 (6.7)	5 (33.3)	9 (60.0)	9 (56.3)	5 (31.3)	2 (12.5)
未 来 (2)	5 (38.5)	5 (38.5)	3 (23.1)	26 (96.3)	1 (3.7)	0 (0.0)	10 (66.7)	5 (33.3)	0 (0.0)	15 (93.8)	1 (6.3)	0 (0.0)

(2) SE 尺度Ⅱにおける自己肯定高得点群(H群)と低得点群(L群)の特徴
両群の心理的諸変数の平均値を Table 12 に示す。

男子において、身長計測値、学業成績、学級内における社会的地位には、両群に有意差は見られなかった。対人イメージでは、「父」に対する信頼、明朗、

Table12. 自己肯定尺度のL群とH群の比較

		男		子		女		子		
		L(15)		H(46)		L(24)		H(37)		
身長計測値(cm)		142.9 (6.19)		144.7 (5.76)		146.2 (6.41)		148.4 (5.32)		
学業成績		3.00 (1.69)		2.61 (1.62)		2.67 (1.63)		3.81 (1.29)**		
社会的地位	被選択総数	2.67 (1.72)		2.98 (2.36)		2.38 (1.35)		3.08 (1.44) ⁺		
	被選択得点(重みづけ)	5.53 (3.81)		6.02 (5.06)		4.96 (3.06)		6.32 (3.07) ⁺		
	被第一選択数	0.93 (0.96)		1.04 (1.15)		0.83 (0.92)		1.08 (0.72)		
対人イメージ	「父」	信頼	4.31 (0.99)		4.94 (0.83)*		4.36 (0.82)		4.84 (0.85)*	
		明朗	4.15 (1.08)		5.28 (0.62)**		4.53 (0.87)		5.20 (0.85)**	
		やさしさ	3.54 (0.94)		4.30 (0.95)*		3.65 (1.09)		4.34 (0.99)*	
	「母」	信頼	4.45 (0.90)		5.03 (0.77)*		4.80 (0.79)		5.28 (0.57)**	
		明朗	4.38 (1.18)		5.14 (0.81)*		5.28 (0.51)		5.41 (0.84)	
		やさしさ	3.83 (1.17)		4.51 (1.01) ⁺		4.28 (1.15)		4.87 (0.83)*	
	「先生」	信頼	4.66 (1.20)		4.93 (0.95)		4.89 (0.75)		5.17 (0.85)	
		明朗	4.82 (0.91)		4.93 (1.23)		5.10 (0.75)		5.26 (1.02)	
		やさしさ	3.82 (0.72)		3.72 (1.09)		3.75 (1.09)		4.06 (0.99)	

** p < .01, * p < .05, + p < .10

Table13. 自己肯定得点のL群とH群のSE尺度Iにおける各項目領域ごとの反応傾向(%)

領域 (項目数)	男			子			女			子		
	L (15)			H (46)			L (24)			H (37)		
	+	0	-	+	0	-	+	0	-	+	0	-
身体 (1)	1 (6.7)	4 (26.7)	10 (66.7)	18 (39.1)	14 (30.4)	14 (30.4)	3 (12.5)	5 (20.8)	16 (66.7)	5 (13.5)	5 (13.5)	27 (73.0)
家庭生活 (3)	2 (13.3)	2 (13.3)	11 (73.3)	24 (52.2)	8 (17.4)	14 (30.4)	8 (33.3)	6 (25.0)	10 (41.7)	20 (54.1)	4 (10.8)	13 (35.1)
学校生活 (5)	4 (26.7)	0 (0.0)	11 (73.3)	28 (60.9)	8 (17.4)	10 (21.7)	6 (25.0)	5 (20.8)	13 (54.2)	18 (48.6)	8 (21.6)	11 (29.7)
過去 (1)	1 (6.7)	5 (33.3)	9 (60.0)	13 (28.3)	10 (21.7)	23 (50.0)	5 (20.8)	2 (8.3)	17 (70.8)	9 (24.3)	8 (21.6)	20 (54.1)
現在 (2)	1 (6.7)	5 (33.3)	9 (60.1)	21 (45.7)	17 (37.0)	8 (17.4)	3 (12.5)	8 (33.3)	13 (54.2)	13 (35.1)	10 (27.0)	14 (37.8)
未来 (2)	9 (60.0)	5 (33.3)	1 (6.7)	36 (78.3)	6 (13.0)	4 (8.7)	18 (75.0)	6 (25.0)	0 (0.0)	30 (81.1)	7 (18.9)	0 (0.0)

やさしさ, また「母」に対する信頼, 明朗の各得点で有意差が認められた。いずれもH群の方が高い得点を示し, 自己肯定の高いの方が父親や母親に

対してより望ましいイメージをもっていることが示された。一方, 女子においては, 男子では有意差が見られなかった学業成績に有意差が, また学級内の

社会的地位の被選択総数、得点に有意に近い差が認められた。特に学業成績においてはH群の方が高く、得点差が大きいと言えよう。このことは、女子の場合 self-esteem は学業成績と関連があることを示している。また、対人イメージでも男子と同様に「父」に対する3得点、「母」に対する信頼、明朗得点でH群の得点がL群を有意に上回り、父親や母親に対してより望ましいイメージをもっていると言える。

SE尺度Ⅰにおける項目領域ごとの反応傾向をTable 13に示す。男子においては、身体、家庭生活、学校生活、現在の各領域において、L群に否定的反応傾向の割合が高く、H群に肯定的反応傾向の割合が高い。他方、女子では、学校生活と現在の項目領域でL群の方が否定的反応傾向の割合がやや高いものと読み取れよう。

(3) SE尺度Ⅱにおける積極性高得点群(H群)と低得点群(L群)の特徴

両群の心理的諸変数の平均値をTable 14に示す。男子において、先の自己肯定得点の場合と同じく、身長計測値、学業成績、社会的地位では有意差がみられなかった。対人イメージの「父」に対する信頼得点、「母」に対する信頼、明朗得点、「先生」に対するやさしさ得点で、H群が有意に高い得点を示した。女子においては、自己肯定得点の場合と異なり、「父」に対する信頼得点のみでH群に有意に高い得点が見られ、これ以外では学業成績で有意に近い差が見られるにとどまった。

SE尺度Ⅰにおける項目領域ごとの反応傾向をTable 15に示す。男子ではTable 13と同じく、身体、家庭生活、学校生活、現在の各領域項目で、L群に否定的反応傾向が、H群に肯定的反応傾向が見られた。女子では、ここでも両群に顕著な反応傾向の違いは見られず、積極性の高い者と低い者の特徴は明確にはされなかった。男子においても同様であるが、自己肯定得点の場合とはH群とL群の構成比の大きさが逆になっている点も考慮し、さらに検討が必要であろう。

(4) SE尺度Ⅱにおける自己肯定尺度と積極性尺度の両得点のHH群とLL群の特徴

両尺度とも高得点あるいは低得点の者は男女とも半数程度となり、分析対象がやや少なくなるが、両特性の特質の高低をより顕著に代表するものとして、分析を行う。

両群の心理的諸変数の平均値をTable 16に示す。男子においては、(1)、(2)と同様に、身長計測値、学業成績、社会的地位では有意差は見られない。しかし「父」と「母」に対するイメージのすべての得

点に有意差が認められ、いずれにおいても、HH群がLL群を上回っている。相対的にHH群の方がより父親と母親に対して望ましいイメージをいだいており、より良好な関係が推測される。したがって、男子の場合、self-esteem を形成する上で、両親との関係が重要な役割を果たしていることが示唆されている。また、女子においては、学業成績、「父」に対するイメージの全得点に有意差が認められ、HH群がより高い得点を示した。また、身長計測値、「母」に対する信頼、やさしさ得点でも、有意に近い差が見られた。女子の場合は、男子とは異なり、学業成績や身長計測値にも、両群間に違いが見られ、これらの変数も self-esteem の形成に関係があるものと推測される。

SE尺度Ⅰにおける項目領域ごとの反応傾向をTable 17に示す。男子においては、(1)、(2)で述べたと同様に、身体、家庭生活、学校生活、現在の領域でLL群がより否定的反応傾向を、HH群が肯定的反応傾向を示している。また、女子では両群とも概ね同じような反応傾向が見られ、学校生活と現在の領域でわずかながらLL群に否定的反応傾向が見られる程度であった。

(5) 全体的考察

男子においては、SE尺度Ⅱにより self-esteem が高いと評定された者の方が、父親と母親に対してより望ましいイメージをもっており、より良好な関係をもつものと推測できる。しかしながら、これまで self-esteem を形成すると考えられてきた身体計測値すなわち体の大きさ、学業成績、学級内の社会的地位とは、明確な関係が見いだせなかった。ところが、SE尺度Ⅰの項目領域ごとの反応傾向を見ると、一貫して身体、家庭生活、学校生活、現在の各領域で反応の違いが見られ、これが self-esteem の形成に影響を及ぼしているものと思われる。したがって、身体計測値、学業成績、ソシオメトリック形式のテストに基づく指標という客観的数値では示されなかったものが、文章完成法形式による自由記述の中に表出されたとも考えられる。

また、女子においても、SE尺度Ⅱで self-esteem が高いと評定された者が、男子の場合ほど明確ではないが、両親、特に父親に対してより望ましいイメージを持つ傾向が示され、学業成績についても同じくより高い評価を受けていることが認められた。また、身体計測値についても、self-esteem の高低との関係が多少とも示唆された。したがって、女子にあっては、self-esteem と、両親との人間関係、学業成績が何らかの関係を持つことが推測できる。しかしながら、SE尺度Ⅰでは、self-esteem の高い群と

Table14. 積極性尺度のL群とH群の比較

		男 子		女 子	
		L(44)	H(16)	L(42)	H(17)
身長計測値(cm)		144.7 (5.66)	144.1 (6.17)	146.8 (6.01)	149.2 (5.43)
学 業 成 績		2.55 (1.61)	3.00 (1.79)	3.14 (1.62)	3.94 (1.03) ⁺
社会的地位	被 選 択 総 数	2.70 (2.13)	3.00 (2.44)	2.95 (1.36)	2.47 (1.66)
	被選択得点(重みづけ)	5.57 (4.92)	6.00 (4.62)	6.05 (3.08)	5.18 (3.26)
	被第一選択数	1.00 (1.18)	1.00 (0.89)	1.02 (0.81)	0.88 (0.78)
対人イメージ	信 頼	4.62 (0.96)	5.16 (0.72)*	4.50 (0.79)	5.04 (0.93)*
	「父」 明 朗	4.85 (0.93)	5.38 (0.73) ⁺	4.84 (0.90)	5.25 (0.92)
	やさしさ	4.02 (0.97)	4.35 (1.05)	4.00 (1.06)	4.39 (1.07)
	信 頼	4.69 (0.86)	5.38 (0.60)**	5.08 (0.73)	5.24 (0.58)
	「母」 明 朗	4.87 (1.05)	5.29 (0.62) ⁺	5.35 (0.66)	5.41 (0.92)
	やさしさ	4.17 (1.11)	4.94 (0.78)*	4.64 (0.84)	4.92 (1.04)
先生	信 頼	4.81 (1.05)	5.11 (0.95)	4.99 (0.83)	5.28 (0.83)
	「先生」 明 朗	4.88 (1.10)	5.04 (1.31)	5.16 (0.86)	5.27 (1.09)
	やさしさ	3.61 (0.97)	4.22 (1.03)*	3.90 (0.98)	4.12 (1.16)

** p < .01, * p < .05, + p < .10

Table15. 積極性尺度のH群とL群のSE尺度Iにおける各項目領域ごとの反応傾向(%)

領 域 (項目数)	男 子			女 子								
	L (44)			H (16)			L (42)			H (17)		
	+	0	-	+	0	-	+	0	-	+	0	-
身 体 (1)	11 (25.0)	13 (29.5)	20 (45.5)	8 (50.0)	7 (43.8)	1 (6.3)	6 (14.3)	5 (11.9)	31 (73.8)	2 (11.8)	4 (23.5)	11 (64.7)
家庭生活 (3)	14 (31.8)	8 (18.2)	22 (50.0)	10 (62.5)	3 (18.8)	3 (18.8)	18 (42.9)	8 (19.0)	16 (38.1)	10 (58.8)	2 (11.8)	5 (29.4)
学校生活 (5)	15 (34.1)	8 (18.2)	21 (47.7)	15 (93.8)	0 (0.0)	1 (6.3)	14 (33.3)	10 (23.8)	18 (42.9)	10 (58.8)	2 (11.8)	5 (29.4)
過 去 (1)	10 (22.7)	8 (18.2)	26 (59.1)	3 (18.8)	6 (37.5)	7 (43.8)	10 (23.8)	6 (14.3)	26 (61.9)	3 (17.6)	4 (23.5)	10 (58.8)
現 在 (2)	12 (27.3)	15 (34.1)	17 (38.6)	8 (50.0)	7 (43.8)	1 (6.3)	10 (23.8)	12 (28.6)	20 (47.6)	5 (29.4)	6 (35.3)	6 (35.3)
未 来 (2)	28 (63.6)	12 (27.3)	4 (9.1)	15 (93.8)	0 (0.0)	1 (6.3)	30 (71.4)	12 (28.6)	0 (0.0)	16 (94.1)	1 (5.9)	0 (0.0)

低い群の間に、顕著な反応傾向の違いは見られず、男子の場合とは異なる反応を示している。つまり、self-esteemの形成に、男女とも両親との人間関係が

関連し、女子では学業成績も、関連することが示唆されたが、他の諸変数についてはさらに検討することが必要であろう。

Table16. 自己肯定尺度と積極性尺度の LL 群と HH 群の比較

		男		子		女		子		
		LL(14)		HH(16)		LL(19)		HH(14)		
身長計測値(cm)		143.4 (6.11)		144.1 (6.17)		146.2 (7.01)		150.2 (5.25) ⁺		
学 業 成 績		3.14 (1.66)		3.00 (1.79)		2.58 (2.92)		4.14 (1.06)**		
社会的地位	被 選 択 総 数	2.71 (1.77)		3.00 (2.45)		2.58 (1.35)		2.79 (1.63)		
	被 選 択 得 点 (重みづけ)	5.50 (3.96)		6.00 (4.62)		5.32 (3.07)		5.79 (3.19)		
	被 第 一 選 択 数	0.86 (0.95)		1.00 (0.89)		0.89 (0.94)		1.00 (0.78)		
対人イメージ	「父」	信 頼	4.31 (0.99)		5.16 (0.72)*		4.21 (0.73)		5.00 (0.96)*	
		明 朗	4.15 (1.08)		5.38 (0.73)**		4.49 (0.89)		5.31 (0.93)*	
		やさしさ	3.54 (0.94)		4.35 (1.05)*		3.56 (1.01)		4.31 (1.04)*	
	「母」	信 頼	4.45 (0.90)		5.38 (0.60)**		4.83 (0.81)		5.29 (0.51) ⁺	
		明 朗	4.38 (1.18)		5.29 (0.62)*		5.30 (0.55)		5.43 (1.01)	
		やさしさ	3.83 (1.17)		4.94 (0.78)**		4.47 (0.90)		5.02 (0.92) ⁺	
	「先生」	信 頼	4.66 (1.20)		5.11 (0.95)		4.86 (0.80)		5.31 (0.86)	
		明 朗	4.82 (0.91)		5.04 (1.31)		5.06 (0.81)		5.29 (1.21)	
		やさしさ	3.82 (0.72)		4.22 (1.03)		3.72 (1.07)		4.10 (1.17)	

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

Table17. 自己肯定得点と積極性得点の LL 群と HH 群の SE 尺度 I における各項目領域ごとの反応傾向 (%)

領 域 (項目数)	男			子			女			子		
	LL (14)			HH (16)			LL (19)			HH (14)		
	+	0	-	+	0	-	+	0	-	+	0	-
身 体 (1)	1 (7.1)	4 (28.6)	9 (64.3)	8 (50.0)	7 (43.8)	1 (6.3)	2 (10.5)	3 (15.8)	14 (73.7)	1 (7.1)	3 (21.4)	10 (71.4)
家 庭 生 活 (3)	2 (14.3)	2 (14.3)	10 (71.4)	10 (62.5)	3 (18.8)	3 (18.8)	6 (31.6)	5 (26.3)	8 (42.1)	8 (57.1)	1 (7.1)	5 (35.7)
学 校 生 活 (5)	4 (28.6)	0 (0.0)	10 (71.4)	15 (93.8)	0 (0.0)	1 (6.3)	4 (21.1)	3 (15.8)	12 (63.2)	8 (57.1)	1 (7.1)	5 (35.7)
過 去 (1)	0 (0.0)	5 (35.7)	9 (64.3)	3 (18.8)	6 (37.5)	7 (43.8)	4 (21.1)	2 (10.5)	13 (68.4)	3 (21.4)	4 (28.6)	7 (50.0)
現 在 (2)	1 (7.1)	5 (35.7)	8 (57.1)	8 (50.0)	7 (43.8)	1 (6.3)	2 (10.5)	5 (26.3)	12 (63.2)	5 (35.7)	3 (21.4)	6 (42.9)
未 来 (2)	8 (57.1)	5 (35.7)	1 (7.1)	15 (93.8)	0 (0.0)	1 (6.3)	13 (68.4)	6 (31.6)	0 (0.0)	13 (92.9)	1 (7.1)	0 (0.0)

また、SE 尺度 I と SE 尺度 II を比較すると、SE 尺度 II は self-esteem を規定する他の諸要因との数量的関係等を検討するのに有効であると考えられる

のに対して、SE 尺度 I は self-esteem の内容のより具体的、個別的、質的分析に適しているものと推測される。両尺度の測定している内容について、今後

さらに明確にしていくことが self-esteem のより詳細な分析のために重要であると思われる。

要 約

本研究では、青少年における self-esteem の測定尺度の作成(研究Ⅰ), self-esteem の高低による心理的特質の検討(研究Ⅱ)が目的とされた。研究Ⅰにおいては、小学6年合計384名、中学2年合計67名を対象に調査が実施され、self-esteem 尺度Ⅰ(文章完成法形式, 14項目), self-esteem 尺度Ⅱ(評定尺度形式, 20項目)が作成され、あわせて信頼性、妥当性の検討がなされた。研究Ⅱにおいては、小学6年124名を対象にこれらの尺度を用い、self-esteem の高低による他の心理的諸変数の特徴について検討がなされた。主な結果は以下の通りである。

①男子においては、SE 尺度Ⅱにより self-esteem が高いと評価された者は、低いと評定された者に比べて、父親と母親に対してより望ましいイメージを持っていることが示された(Table 12, 14, 16)。また、SE 尺度Ⅰの項目領域ごとの反応傾向でも、一貫して身体、家庭生活、学校生活、現在の各領域で両者の反応傾向に違いが見られ、両親との人間関係に加え、これらも self-esteem の形成に關与しているものと推測された(Table 13, 15, 17)。

②女子においても、男子の場合ほど明確ではないが、SE 尺度Ⅱにより self-esteem が高いと評定された者は、低いと評定された者に比べて、両親、特に父親に対しより望ましいイメージを持つ傾向が示され、さらに学業成績についても同じくより高い評価を受けていることが認められた(Table 12, 14, 16)。また、身体計測値についても、self-esteem の高低との関係が多少とも示唆された。

③ SE 尺度Ⅰと SE 尺度Ⅱを比較すると、SE 尺度Ⅱは self-esteem を規定する他の諸要因との数量的関係を検討するのに有効であると考えられるのに対して、SE 尺度Ⅰは self-esteem の内容のより具体的、個別的、質的分析に適しているものと判断された。

引用文献

- Coopersmith, S. 1959 A method for determining types of self-esteem. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **50**, 87-94.
- 遠藤辰雄・安藤延男・冷川昭子・井上祥治 1974 Self-Esteem の研究 九州大学教育学部教育心理学部門紀要 **18**, 2, 53-65.
- 海保博之・山下恒男 1968 自尊心尺度(SEI)作成の試み(Ⅰ) 日本心理学会第32回大会発表論文集 338.

加藤隆勝・堀 啓造・高木秀明 1981 青少年の対人イメージの因子的特質 筑波大学心理学研究, **4**, 77-91.

松下 覚 1969 Self-esteem の研究 —— self-esteem scale の作成 日本教育心理学会第11回総会発表論文集 280-281.

西平直喜 1983 青年心理学方法論 有斐閣.

大野 久 1984 現代青年の充実感に関する一研究 —— 現代日本青年の心情モデルについての検討 教育心理学研究, **32**, 100-109.

Rosenberg, M. 1965 *Society and the Adolescent Self-Image*. Princeton: Preinceton Univ. Press.

斎藤耕二 1968 学生・勤労青年の生活意識および生活態度の研究 依田新(編) 現代青年の人格形成 金子書房.

菅佐和子 1974 心理テストによって測定された Self-Esteem の研究 京都大学教育学部紀要, **22**, 64-69.

杉浦喜久代 1974 文章完成法による自己概念の分析 —— 中学生の場合 日本教育心理学会第16回総会発表論文集, 234-235.

杉浦喜久代 1975 文章完成法による自己概念の分析Ⅱ —— 中学生の場合 日本教育心理学会第17回総会発表論文集, 264-265.

杉浦喜久代 1976 文章完成法による自己概念の分析Ⅲ —— 中学生の場合 日本教育心理学会第18回総会発表論文集, 238-239.

後 記

本研究にあたり多くの方々からご協力、ご援助をいただきました。特に、杉浦喜久代、出口博四、増田賢二、松本ゆり子、瀧野孝子、関山千恵子の各先生には大変お世話になりました。記して謝意を表します。また、調査にご協力いただいた児童、生徒の皆さんにも厚く感謝いたします。

—1986. 9.30 受稿—